



さぎ みや  
鷺の宮卓話

忘れてはならない人々

研究所長 太田敬雄

3・11の大震災以降、日本社会は大きく変わりつつあるという予感に捕われているのは私だけだろうか？あの地震・津波の範囲が余りにも広く、従って被災の内容も地形や地域社会の形によって実に多様である。

漁村の被害と対応の仕方は当然農村の被害の対応とは異なるし、原発周辺の状況もまた大きく異なる。一カ月以上経っても、メディアはその全貌を捉えきれず、伝えきれていないように思われる。

ある大学の授業で、私は学生達に海外のメディアがこの東日本大地震がどのように報道しているかを検証させた。そこで明確になってきたことが一つあった。それは、地震発生当初の映像は別として、その後の日本の報道では「死者」は数でしか報道されていないのに対して、海外諸国のメディアは写真や映像で津波にさらわれていく人の姿、亡くなった方の遺体や遺体の収容の様子、棺桶の土葬の有り様などを報道していることだ。

日本のメディアが「死」を隠しているとは思わない。身近な人々の悲惨な姿を衆目に晒さないという配慮が働いたものと思われる。しかし、結果として「死」にまつわる報道は日本では最大限自粛されているのだ。その善意の配慮の中で、私た

ちは何万にもなる命を落とされた人々を記憶の奥に追いやり、忘れ去ろうとしている。その方々の遺体を収容するために日夜大変な思いをしている大勢の人々の存在も又見なくなってしまっている。

もちろん、今の日本社会の第一の問題は被災者の救援である事には違いない。しかし、私たちは同時に亡くなって逝かれた人々の事をしっかりと受けとめ、記憶に留めなくてはなくてはならない。そうでなければ、彼らの死は「無駄死に」になってしまう。亡くなった方々の遺体収容に最前線で当たっている大勢の人々の苦労も又報われなくなってしま

う。死者への思いをしっかりと受けとめて、これからの日本社会の再構築を進める時、その人々の死と、遺体収容のため日夜働いている方々の存在が「無駄死に」「報われない労苦」では無くなるのではないだろうか。

仙台からの帰り道に出会ったメキシコからの救援隊のメンバーの話を聞くことが出来た。彼は「日本は凄い。遺体探し・収容活動を二度繰返してから初めて重機を入れて瓦礫整理をする。これまで自分が救援に行った被災国では遺体も瓦礫もいきなり重機で片づけていた。」彼をうならせた日本の死者に対する手厚い配慮が、逆にその人々の存在を忘れさせるような事になってはならない。

不慮の死をとげた人々に思いを馳せつつ、これからの日本を構築していく事で、忘れてはならない人々の存在が活かされると信じる。

2011年 特定非営利活動法人 国際比較文化研究所総会案内

今年度の総会は2011年5月28日午後開催します。万象お繰り合わせのうえご参加ください。皆様のご意見を必要としています。

記

- 1、 日 時：2011年5月28日（土） 3時30分～4時30分
- 2、 会 場：「まなばる」（18号線バイパス。ヤマダ電機前。からおけ「まねきねこ」隣り。）
- 3、 議 題：2010年度事業報告、会計報告  
2011年度予算、会計報告、事業計画、人事、

会員の皆様にはこの日程を空けておいてくださいますようお願いいたします。出欠は同封のハガキでご連絡下さい。御欠席の方は委任状に押印をしてご投函下さいますようお願いいたします。

☆なお、当日午後1時30分から3時にかけて理事会を開催します。役員の方は宜しくおねがいします。





## 多文化交流 in マラン 2011 2月22日～3月2日

今年の多文化交流 in マランは難産だった。募集しても全く反応がない。一度はあきらめて、フライトもすべてキャンセル。そこに常葉学園大学の学生達から参加申込が届いた。国際ことば学院日本語学校の野田敏郎先生からの紹介で、このプログラムを知った日本語教育専攻の学生達だった。一度はあきらめたプログラムを復活させたが、今度は航空券が取れない。日程を変更してやっと実施の目途が付いた所、今度はその日程なら参加出来るという声が上がリ、最終的にリーダーを含めて10名の参加を得ることが出来、マランの菅ヶ谷マコさんを中心としたスタッフのお陰で、急な変更にも快く応じて貰うことができ、充実した多文化交流を実施することができた。感謝である。

フライトは取れたが、半日以上も台湾の桃園空港で乗継便を待つことになった。そこで急遽台湾での半日多文化交流を組み込むことにした。この企画に応えてくれたのは、過去の多文化参加者、梁凱銘君を中心に短く忙しいが、充実した半日を台湾で過ごすというおまけが付いた。

二人の参加者と、スタッフの中心になってくれたキャンディさんから感想文をいただいた。キャンディは過去の多文化交流に参加、その後文科省招聘留学生として東京で一年過ごした後、ブラウイジャヤ大学に戻り今回はスタッフのまとめ役として活躍してくれました。

### スタッフとして

Brawijaya 大学 Candy Koo

こんにちは。ブラウイジャヤ大学4年生のキャンディーです。「多文化交流 in Malang」のスタッフになったのは2年目ですが、やはりこのプログラムを通して色々な勉強ができて、とても貴重な経験をしました。私は2007年(インドネシア人参加者・パートナーになりました)、2009年、そして今年2011年の「多文化交流 in Malang」に参加しましたが、今年は最も良かったと思います。スケジュールは時間をゆっくり楽しく過ごしなが、充実した経験ができるように、みんなのスタッフと一緒に考えました。スケジュールを決めた後、7人のスタッフの間にそれぞれ項目の責任者を決めて仕事をやりましたが、当日にはただ計画通りにやる、そういう簡単なことではありませんでした。病人が出たり、車が動けなくなったりして、色々ありましたが、スタッフがバックアップし合いながら、もちろん周りの人々の助けのおかげで、今年の「多文化交流 in Malang」が無事終わりました。

私はスタッフの中心として、大切な勉強になったことを一つ言いましたら、ほかのスタッフやインドネシア人参加者、つまりチームの仲間をもっと信じることです。なぜかというと、チームの仲間はみんなできる限りのことをやり、もう精一杯頑張ったからです。あるドラマのセリフみたいに「後輩の成長も先輩の仕事ですよ」と、私も自分の成長だけでなく、後輩の成長のためにも考えなければなりません。

今年の「多文化交流 in Malang」はもう終わってしまいましたが、来年は今年よりもっと良いプログラムができるように、過去や今年の経験をなにか生かせることを来年のスタッフに伝えます。これからも「多文化交流 in Malang」はどんどんより良いプログラム、関わるみんなの一生の宝ものができるプログラムになるように心の底から祈っています。



日本の参加者一同成田に集合



ディスカッション参加学生



成田で初めて出会った10名が、僅か一週間ほどの交流の中で実に豊かな交流の時を持ち、帰る頃には旧知の仲ようになったのは、考えて見ればいつものこと。「本当の多文化交流は解散した後に始まる。」といつも言っているが、最近はその交流の手立てとして Face Book が有効な手立てとなっている。世界はどんどん小さくなり、多文化交流の必要性も大きくなると共にその中身も充実してきていること

は何とも嬉しいことだ。

今年のプログラムの特徴は幾つかあるが、その一つとしてマランでの準備が過去の多文化参加者がスタッフとして活躍してくれたことを特筆したい。これまでも過去の経験者がスタッフとして盛り上げてくれたが、キャンディを中心に一人一人が役割を分担し実に充実したプログラムを組んでくれたことに感謝する。

もう一つは常葉学園大学で日本語教育を専攻している学生の参加が挙げられる。今後も継続して日本語教育を学ぶ学生の参加が得られるなら、さらに中身の濃いプログラムを作成することが出来ると思われる。

## ちゃんと生きて帰れるか？！

常葉学園大学 小林誉華 (こばやし・よしか)

マランに行く前日まで、今回の旅は不安なことだらけでした。日本ではあまり知られないインドネシア……。大げさですが、楽しめるかというより、ちゃんと生きて帰れるかをとっても心配していました。

今回の旅で一番の収穫は、旅の目的でもあった、その土地の人とたくさん交流することができたということです。現地に着いたとき、日本語が通じるので、「すみません」と声をかけたところ、反応が満面の笑顔。きっと外国人を相手にしてお互い最初はぎこちないのだろうなと思っていた私には驚きでした。傍から見れば当たり前のことかもしれませんが、現地で見ると彼らの態度には、特別な魅力があります。不安だった私はその笑顔ですぐに、なんていいところなんだ、と思ってしまいました。

私達がいた一週間、周囲の人達はいつも、楽しいときは大いに盛り上がり、気遣うことを忘れず、一緒に行動していて気まずいということはありませんでした。「どうしてそんなにいい人なの？」と聞いてみたところ、「え！普通だよ。なんでそんなこと聞くの？」と逆に驚かれました。その反応が謙遜ではなかったのが、とても気持ちよかったです。一週間生活してみて、インドネシアは日本と違い、物が溢れていないため、生活はシンプルだと思いました。きっと、日本人のように心がごちゃごちゃしていない分、人に優しくする、ということがストレートにできるのだと思います。日本の優しい人は、インドネシア人と比べると少し考えすぎなところがある風に感じます。

インドネシアでは、やはり、カルチャーショックは沢山ありました。トイレが難しい、交通量の多い道路に信号がない。日本にいるときはそれがとても心配でしたが、今では逆にそんな“ありえない”体験ができてよかったと思います。今までなかった生活習慣をしながら、その生活が当たり前の人々とたくさん交流する。そうすることで、日本には気付かない、新しい見方を吸収できるからです。

## 通じ合える

高崎経済大学 岸綾夏 (きし・あやか)

空港に降り立ったあの瞬間、本当に外国に来たことを実感しました。体を覆う湿気、嗅いだことのない匂い……。これから迎える新たな出会いを思うと、胸が高まらないはずがありませんでした。

この交流を今となって振り返ると、とにかく毎日が夢のような時間でした。パートナーのジーとの出会い。こんなにも最初から分かり合えるのかと思うほど意気投合し、なんでも語り合える友になりました。マランの街の散策に出かけた時も、私たちが普段友達と過ごす日々と同じように、たくさん話して笑うことで共有するそんな時間でした。

遠い異国だと思っていたインドネシアの地であっても“幸せ”と思える時間が存在していたように思います。

ホストファミリーとして受け入れてくれたエイラ一家と過ごした日々も忘れられないものとなりました。とてもおいしい料理を作ってくれたイブ、笑顔はじける妹エクサ・家族の一員として迎え入れてくれ、大きな優しさにも触れることができ、ここでも自分の居場所を見つけた気がしました。

今、エイラとは facebook での交流を続けています。先日には彼女が日本語論文大会で使う原稿を添削するという貴重な経験をしました。今でもインドネシアの友との交流し接点がある事が本当にうれしくて仕方ありません。

多文化交流を終え、国籍が違っても文化や食べ物が違って人もは“通じ合える”“分かり合える”こと、そして、どこにでも自分を支えてくれる、私自身が何かを与えることができる人たちが世界中どこにでもいることを心から感じています。

目をキラキラと輝かせて過ごしている友達に出会い、こんなにも笑えるのかと思うほど毎日笑顔だった日々。その一日一日の思い出は私にとって大きな財産となりました。この交流会を通して出会った人々、そして企画して下さった太田先生に感謝の気持ちでいっぱいです。これからは、文化の違いを積極的に受け入れていき、世界の輪を広げていきたいと思っています。

加瀬谷恵のショート  
・超ショート

## 十五歳の涙



加瀬谷 恵

あやちゃんとは、最後の日、大好きなジャニーズのけんとくんの写真を見せてくれた。

「先生、この間のコンサートでね、けんとくんが手振ってくれなかつたんですよ。でね、妹が超むかつくんですよ、ちよつと手振ってもらったからって調子に乗っちゃって。」

また始まった。授業中ずつとしゃべっているのはいつものことなのだが、妙に大人びた目を持つ少女は気づいているのだろうか。自分の口から、必ず妹の話が出てくることに。

「そうそう聞いて先生、私が優秀な妹の人生を邪魔してる、お父様も会社経営してるからその名に恥じないように生きなさいって占い師に言われちゃって。その通りだなあって思って、超ウケたんですよ。」

乾いたケラケラと笑う声。あやちゃんの大人びた切れ長の目の奥に、一瞬曇ったものがよぎったような気がした。優秀な妹に対する焦りの感情は、いつしか嫉妬へと変貌し、それを誰にも打ち明けられない憤りの気持ちは、自己を傷つけることで何とか彼女の心の内に保たれていた。

四人兄弟の第一子。社長令嬢。周囲の期待に反し、成績は下がる一方。塾では先生が気に入らないと授業の途中でも帰ってしまうような子だった。

「私は、そんなひどいこと言う占い信じない。あやちゃんはちゃんとやってるよ。私なら、そんなこと出来ない。」

あやちゃんは、私をまっすぐ見て「先生は良い人ですね。」と言った。十五歳とは思えない、大人びた暗い目だった。

## 釜山外大の学生との多文化交流 in 釜山2011夏

### 参加者募集中！

この夏にも釜山外大生との多文化交流を実施することになりました。大勢の方の参加をお待ちしています！地震・津波・原発事故にみんなが内向きになってしまったこんな時だからこそ海外に出て見よう！外から日本を考えよう！明日の日本を考えよう！

#### プログラム概要

日時：2011年8月18日（木）～8月25日（金）7泊8日

参加費：12万円（旅行保険・一部食費等別途）申込金3万円を含む

募集人員：20名（12名にて実施）申込順。定員になりましたら締め切ります。

申込締切：2011年6月30日 申込金3万円 郵便振替：加入者 国際比較文化研究所

参加資格：18歳以上の健康な方。使用言語：日本語 口座番号 00510-0-61974

企画：特定非営利活動法人国際比較文化研究所 責任者：太田敬雄

申込先：379-0124 安中市鷺宮 3413-3 国際比較文化研究所 宛下記内容を送って下さい。

参加希望者は氏名（漢字とローマ字・ローマ字）、生年月日、住所、電話・携帯・メールアドレスと共にパスポートのコピー、パスポート写真大の笑顔のスナップ（上半身・正面）、またパスポートを持っている人はパスポートのコピーを添えて、メール：[mtharunac@xp.wind.jp](mailto:mtharunac@xp.wind.jp) または郵便で申し込んで下さい。

なお、締切は6月30日ですが、少しでも安く組むためには出来るだけ早く航空券を確保する必要があります。参加希望者は早めに申し込んで下さい。

今年も釜山外大で日本語を専攻する学生達のサークル「のびのび」（顧問：林先生・担当：梶原先生）のメンバーによって韓国側の準備が進められている。今年の夏はどのようなプログラムになるのか、今から楽しみだ。日本語専攻の学生との交流、ホームステイ、韓国式の宴会：いずれも貴重な経験となる。



## 3・11 大地震・津波・原発事故の余震 —マナパルカレッジ—

東日本大地震以降の自粛モードの中で、先号でお知らせした「冷泉公裕ライブ」と「マナパルカレッジ」は吹き飛ばされてしまった感がある。群馬県内と近隣の方々にはハガキでお知らせしたように、すべて中止するしかなかった。真に残念な決定だったが企画するものとしては、今は被災者救援活動が最優先と判断した。

しかし、いつまでも内向きにこもってしまっただけではいけない。頃合を見計らって今後の在り方を検討していきたい。そこで当面は**第二土曜日には懇談会**を午後2時からマナパルで開催する事とした。

第1回は4月9日に開催。10名弱の参加者を得て、現状等を気楽に語り合った。5月は14日に東日本大震災以降の日本と国際比較文化研究所の役割について、気楽に懇談の時を持つ。一人でも多くの方が参加し、共に考えて下さることを祈る。やがてまた「マナパル・カレッジ」再開を検討できる日が来ることを願いつつ。

## インドネシア国立ブラウイジャヤ大学と提携へ

今年の春に「多文化交流 in マラン 2011」でマランのブラウイジャヤ大学を訪問した折に、日本語学科長から協定を結ぶ可能性を打診された。その場で有る程度の話し合いを持ち、準備を進めてきた結果、学術と文化の分野で相互に協力しながら交流する協定を結ぶことになった。

このニューズレターがお手元に届く頃、所長、太田敬雄は同大学に出向きブラウイジャヤ大学の学長と協定書に署名をしていることになる。これまでは同大学の日本語専攻の学生達との多文化交流や、その多文化交流に参加した学生の中から、数人研究所で日本に招聘してきた。すでに6名の若者たちが招聘プログラムで来日しており、日本から多文化交流プログラムでマランに行ったメンバーは数十人にのぼる。このような活動が評価されて協定を結ぶこととなった。今後の「多文化交流 in マラン」ならびに「インドネシアの学生招聘プログラム」にとって大きな力となることだろう。



Universitas Brawijaya

1963年に設立されたブラウイジャヤ大学は、現在法学部、社会学部、理数学部、獣医学部、海洋生物学部、農学部など14の学部を持つ総合大学で、学生3万人、教員1640名を擁する。

言語・文化学科は1986年に言語・文学プログラムが発展して出来た新しい学部（Cultural Science）にある唯一の学科である。この学科には英文科、日文科、仏文科があり、学生総数1000名ほどである。

また、ブラウイジャヤ大学のあるMalang市は東ジャワ島2番目の大都市で、人口78万人。高地にあるため、涼しく生活しやすい都市である。オランダの支配下に有った時にはオランダ人の避暑地として栄え、日本の軽井沢のような発展をしてきた。

## 高崎経済大学木暮ゼミの実習受け入れへ

今年度、高崎市立高崎経済大学の地域政策学部観光政策学科で、多言語・多文化共生の地域づくりについて研究している木暮律子先生のゼミの実習を受け入れる事となった。ゼミ生11名と他のゼミからの参加者数名を加え、15名程度の3年生が国際比較文化研究所で実習を行う。

国際比較文化研究所というNPOの活動全体を見て、実習して貰うため、多文化交流関係の実習の他に、マナパルでの実習、さらには現在マナパルが取り組んでいる東日本大震災の被災者救援活動にも参加して貰う予定である。

多文化交流関係では、今年の夏の「釜山外大生との多文化交流 in 釜山」の企画・準備に協力して貰うほかに、昨年末に実施した「留学生との多文化交流 in ぐんま」も協力してもらいながら立ち上げていきたいと計画を練っている最中である。これは「学習の森」確保が条件となるが、予定としては8月5日から9日に実施したいと考えている。その時はまた大勢の皆さんの協力を仰ぐこととなるだろう。ホストファミリー、食事ボランティアなど、ご協力いただける方にはご連絡を頂きたい。

### 「留学生との多文化交流 in ぐんま 2011」ボランティア希望者の連絡求む！

今回の東日本大震災にもめげず、日本に残って留学生生活を続ける若者を励まし、彼らの友だち作りを支えて下さい。ボランティアをお願い出来る方は研究所までご連絡下さい。

## ☆会費納入とご寄付のお願い☆

大勢の皆様のご協力によって2010年度も研究所らしい活動を続けて参りました。「相互理解に基づいた、より豊かで平和な地球を創るために」 これからも一步一步、試行錯誤しながらも進んで参りたいと決意を新たにさせられた12年目を歩み始めています。

会員の皆様に支えられて活動を続けられていることに心から感謝しております。**年会費は個人が2000円**です。振込用紙を同封しますが、ご寄付下さる方のため、また新入会員のための振込用紙です。決してご寄付を強要するものではありません。

**「まなばる」の活動、「まなばるXD」**のスタート、そして3月11日の震災救援活動と精一杯の活動を続けております。多目的教育施設「まなばる」をご支援下さいますようお願いいたします。

**インドネシア人学生招聘事業「多文化交流 in 関東」**、夏に実施を考えておりましたが、震災の影響もありこのプログラムの実施は延期しなくてはならないかも知れませんが、延期はしても必ず日本語を積極的に学び、日本訪問を夢としてはいても、私費での来日は難しいインドネシアの若者達のために活動を続けます。これからも宜しくお祈りいたします。

**◇会員増計画◇** 新しい会員をお誘いください。入会に条件はありません。国際比較文化研究所の活動に賛同し、ご協力下さる方はどなたでも大歓迎です。これからの世界平和実現を願いつつ多様な教育・文化活動をつづける研究所を理解していただき、支えて下さる方の一人でも多くがご参加くださるようお願いいたします。

## 会費・寄付(2011. 2. 5. ~2011. 4. 20) <敬称略・順不同>

<入会+会費>菅ヶ谷マコ、安斉修宏、張嘉優、丸山輝彦、宇賀神正美・真実。

<会費>皆様の変わりないサポートのおかげを持ちまして活動を徐々に広げていく事が出来ております。有難うございます。なおカッコ内の年度記載の無い方は2011年度分の会費をお支払いいただきました。荒井美幸、阿部昭子(11,12)、徳増弘子、今井睦子、堀口将太郎、林恵美子、内田穂積、長坂達彦、大江士、飯田俊、小倉寿、永田強一、村井田和夫(12)、長谷川昇、柴山享、イースター社、梶原悦子(10)、山縣英明、吉田省史郎、板橋満男、新井美弥子、小坂景子、大塚正子、森泉孝行、熊倉浩靖、中司和雄、森啓(12~16)、渡部恵知子、土屋操、山崎恵美子、福田則行、倉沢淑子。

<「インドネシアより招聘」「多文化交流 in 関東」指定寄付>小山直美、長谷川昇。御協力有難うございます。今年度は震災の影響もあり、インドネシアからの招聘プログラムは延期になるかも知れませんが、タイミングを見て継続して参ります。また次回の「多文化交流 in 関東」にもご協力をお願いいたします。

<マナパル 指定寄付>渡部恵知子、佐藤修。マナパルがさらなる飛躍を準備しておりますなか、心強いお支えに感謝します。多目的教育活動の支えとして有効に活用させていただきます。なお復旧支援活動へのご寄付もここに加えております。

<一般寄付>阿部昭子、大江士、永田強一、村井田和夫、山縣英明、板橋満男、森泉宏昭、今井たみ子、福田則行、倉沢淑子、木暮直晃。有難うございます。必要とされる所も多くなってきました。有効に使わせて頂きます。

**編集後記**：3月に発行予定だったこのニューズレターだが、3・11大震災の後、どうにも作業が進まなかった。しかし、その間にも次々と大きな動きが有り、ついに発行が5月にずれ込む事態となってしまった。総会の案内も少々遅くなってしまった。申し訳なく思いつつ今年度の第一号をお届けすることが出来て感謝。多目的教育施設まなばる・被災者救援活動・多文化交流プログラムなど今年も意欲的に進めていきたい。皆様のご協力をお願いしたい。

**Newsletter 発行：特定非営利活動法人国際比較文化研究所**

事務所：〒379-0124 群馬県安中市鷺宮3413-3

電話：027-382-5998 FAX：027-382-6393

e-mail：[mtharunac@xp.wind.jp](mailto:mtharunac@xp.wind.jp)

HP：<http://www8.wind.ne.jp/mthc>

MANAPAL ブログ：<http://manapal.gunmablog.net/e80854.html>

郵便振込口座番号：00510-0-61974 名称：国際比較文化研究所